

KINJO LILY MARCHE 大学と地域社会をつなぐ 金城リリールマルシェを開催しました。

2025年5月29日(木)、大学のセンターコート(芝生広場)で「金城リリールマルシェ(10:00-16:00)」を開催しました。本学の研究推進・地域連携センターが運営するこのマルシェは、「大学と地域をつなぐ」をコンセプトに2024年から始まった企画で、3回目となる今回は、お弁当やパン、ドーナツ、アジアンフードなど、個性豊かな10店舗が出店。いずれも女性が活躍されていたり、地産地消など地域に根付いた活動をされているお店で、店主のこだわりや想いが詰まったフードやスイーツは、大人気を博しました。

地域の皆さまも参加できるマルシェも開催。

今回のマルシェは在学生・教職員を対象とした学内イベントでしたが、昨年度は大学を開放して、学外の方も参加できるマルシェも開催。大変ご好評をいただきました。今年も、7月10日(木)(一般開放)、10月16日(木)(学内向け)、クリスマス礼拝と同日で一般開放もする12月18日(木)と、あと3回の開催を予定しています。金城リリールマルシェで、美しいキャンパスの四季を感じる優しいひとときをお楽しみください。



研究推進・地域連携センター 設立の目的と活動内容。

研究推進・地域連携センターは、大学の多岐にわたる研究活動を支援・推進するとともに、企業や地域の皆さまとの連携事業のさらなる拡大、拡充を進め、活動を通じて社会に新たな価値を創出し、社会に貢献することを目的に、2024年度に新たに設置されました。地域・社会連携事業の窓口として、多種多様なニーズを受け入れ、本学の人的・物的・知的資源を活用し社会や地域への支援を行っています。また、地域につながる大学として、大学開放事業にも取り組んでおり、大学の人的・物的・知的資源を学内外に広く発信しています。今回ご紹介した金城リリールマルシェもこうした活動の一環で、学生プロジェクトによる商品や学内でつくられた商品はじめ、地域の人気店が出店。地域の個人事業主の方や女性オーナーなどとのつながりを作りつつ、学生のプロジェクト活動の成果発表、学生出店によるアントレプレナーシップ教育にも活かしています。



キッチンカー 4台にテントショップが6店。素材や製法にこだわり、見た目にも楽しいグルメがキャンパスに集結！



天然酵母のパン、めっちゃおいしいです！



どれもおいしそうで、迷っちゃうね。



ランチタイムは、サンドイッチやお弁当アジアンフードが大人気。



モチモチのドーナツ、いかがですか？

はい。焼きたてのベビーカステラです！



いっぱい買っちゃいました！





年長児が取り組むいすづくり。 その時間の中で育まれる「生きる力」。



子どもたちの育ちを考える時、キーワードとして出てくる「生きる力」は、幼稚園教育要領や小学校の学習指導要領でも大きく取り上げられるようになりました。金城学院幼稚園では、子どもたちが自分を主人公として、主体的に園生活を送ることが、その後の生きる力につながっていくと考えています。そのためにはどのような保育者の援助が必要なのか、楽しみながら経験していくための環境

づくりを日々模索しています。今回は年長児が取り組む「いすづくり」を通して、子どもたちのなかに「生きる力」がどのように育まれていくのか、その様子を紹介합니다。



憧れだったいすづくりに、心を弾ませて。

いすづくりは、年少・年中の頃から年長児の姿を見て、憧れていた活動です。「年長さんになったらできるんだ!」と、子どもたちはこの活動をとっても楽しみにしています。これまでの保育でも、釘打ちや木工の経験を積み重ねてきましたが、いすづくりはその集大成。何本もの長さや幅の違う木材を、見本を見ながら自分たちで組み立て、ボンドで接着し、乾いたら釘を打つ。釘が曲がってしまったら、もう一度打ち直す。そんな工程を通して、自分たちの手で、自分たちが使ういすを作り上げることをねらいとしています。釘打ちでは“失敗”してしまう子どもも多くいますが、失敗したからおしまいではありません。釘が曲がってしまったら釘抜きを使って抜き、新しい釘を打ち直す。釘を打っているうちに木が外れてしまったら、もう一度ボンドをぬり直してから組み立てる。完成をめざして、次にどうしたら良いかを考える力、粘り強くものごとに取り組む力が育っていきます。

上手に釘が打てたね!



ボンドを塗る場所はここかな。



いよいよ最後の仕上げに入ります。

時には仲間と協力して作業します。

自分で計画し、見通しをもって取り組む。

いすづくりの工程は全部で8つ。一斉に同じペースで進めるのではなく、子どもたち一人ひとりが自分のペースで取り組みます。「今日は④の工程をしよう」「まだ⑤が終わってないから、今日やるか、明日にするか」「今は遊びたいから、昼ごはんの後にやろう」など、いすづくり用のカレンダーを見ながら、遊びや生活の見通しをもって計画を立てていきます。つまり、子どもたち自身で園生活をスケジュールリングしていく。それは、いすづくりのもう一つのねらいでもあります。カレンダーは子どもたちが見やすい場所に掲示し、各工程を写真付きで説明したカードも用意。一人ひとりが見通しを持ち、計画を立てて取り組んでいきます。時には「〇〇ちゃん、一緒にいすづくりに行こ!」「〇〇くん、まだ⑥が終わってないよ」などと声を掛け合う姿も。遊びに夢中になり、あと一回しかチャンスがなかったり、釘打ちが思うようにできなかったりということもありますが、それも“経験”。「次は早めにやろう」「毎日カレンダーをみよう」と、子どもたち自らが考え、行動する姿勢が育っていきます。

いすづくり
カレンダー



いすづくりを通していろんな経験をする。 その積み重ねが「生きる力」につながる。

与えられたことだけを行うのではなく、自分たちで課題を見つけ、どうしたら良いかを考える。時には仲間と協力しながら、自分たちの“やりたいこと”を実現していく力を蓄えていく子どもたち。こうした力は単に「できたか、できなかったか」という結果だけではなく、ものごとに取り組む姿勢、ひいては、「生きる力」につながっていきます。

もうすぐ完成だ!!





日本食品化学学会 第31回総会・学術大会で 本校の3チームが探究活動の成果を発表！

3チーム、それぞれを代表して話をしてくれた大畑菜央さん、榊原花梨さん、加古夢叶さん。「DIGNITY」の授業を担当する山内麻記子先生(左)、仲野徳記先生(右)と。

「宇宙ステーションで食べる“昆虫うどん”を開発しよう!」「ピーマンが苦手。どうしてもおいしく食べられるだろうか?」「色が変わると、味の感じ方も変わるのかな?」そんな自らの興味や関心から始まった探究活動の成果を携えて、本校の3チームが、2025年6月6日、立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催される日本食品化学学会 第31回総会・学術大会でポスター発表を行います。探究活動のきっかけや研究の内容、探究の面白さと難しさなど、学会発表の準備に勤しむ生徒たちに話を聞きました。(4/24取材)



自らの「問い」から始まる 探究の旅。

生成AIやビッグデータが社会のあり方を大きく変えつつある今、本校では2年生コースⅡ・Ⅲの「DIGNITY」の授業で「データに基づく探究活動」に取り組んでいます。生徒たちはまず、相関係数やT検定、質問紙法、テキストマイニングなどのデータ分析手法を学び、その上で自らの興味や関心に基づいてテーマを設定し、情報収集や分析、実験を重ねながら探究活動を進めていきます。今年度は、その中から選ばれた3つの研究が、「日本食品化学学会 第31回総会・学術大会」の高校生企画部門でポスター発表をすることになりました。なお本校は、2024年度より文部科学省「DXハイスクール」に採択され、DX予算で3Dプリンタや各種センサーなどのデジタルツールを整備。今回学会発表する生徒たちも、これら最新のツールを活用しながら、研究に取り組んでいます。

学会発表のきっかけは、 先輩からの呼びかけから。

今回、学会で発表することになったのは、金城学院の中・高・大(薬学部1期生)の卒業生で、学術大会の実行委員長でもある布目真梨さんが、SNSで「後輩たちにも発表してほしい」と呼びかけたことがきっかけです。昨年度、学内で開催した「DIGNITY最終ポスター発表会」には布目さんもゲストとして参加いただき、研究発表を見ていただいた上で、有望な3つの研究を大会に出すことになりました。「探究を通じて視野が広がり、自分の将来が見えてくる生徒もいる。そんな変化の瞬間に立ち会えるのが探究の醍醐味」と仲野徳記先生。山内麻記子先生も、「学会発表は生徒の自信や達成感につながる。指摘も含め、すべてが貴重な経験」と話します。問いに向き合い、答えを探していく。その経験は、教科書にない、深く豊かな学びへとつながっていくことでしょう。



宇宙ステーションでの 長期滞在を支える 「昆虫うどん」に 挑戦！

大畑 菜央さん
(高3)

宇宙ステーションでの長期滞在では、筋肉や骨が弱ってしまうため、タンパク質やカルシウムの補給が不可欠です。その解決策として着目したのが「昆虫食」でした。試作したのは、粉末状にしたコオロギを練り込んだ乾燥うどん。長期保存が可能で、栄養価もアップ。さらに、コオロギ入りの出汁には片栗粉でとろみをつけ、食べやすさも工夫。ただ、羽の食感や独特のにおいが課題に。出汁にネギを加えることで多少は軽減できたものの、実用化には改良の余地があります。高タンパクで環境にも優しい昆虫は、災害時の非常食としても注目されています。今後は他の昆虫

も取り入れながら、新たな宇宙食づくりに挑戦していきたいです。

コオロギの粉を練り込んだ昆虫うどん



ピーマン×ラムネ=? おいしさの 化学反応を解明 したい！

榊原 花梨さん
(高3)

私は野菜、とくにピーマンの青臭さや苦味が苦手で、それを克服したいという思いから「苦味の研究」に取り組みました。まず、生のピーマンをプリンやチョコなど、いろんな食べ物と一緒に食べてもらう実験を行ったところ、苦味や青臭さを一番やわらげてくれたのは、意外にもラムネでした。そこで、クエン酸とブドウ糖の割合を変えた5種類のラムネを手作りし、味の感じ方にどのような変化があるかを調べました。結果、成分比で多少の違いは見られたものの、苦味や青臭さを軽減する明確な要因は特定できませんでした。今後は、ピーマンに含まれる苦味成分を抽出し、ラムネの成分との化学反応に注目した研究へと発展させていきたいです。

ピーマンとラムネを合わせるとまるで果物!



色で味が変わるって ホント? 見た目と味覚の ふしぎな関係。

加古 夢叶さん
(高3)

「SNSで青いカレーを見て、なぜか食欲がなくなった。なぜ、色で味の感じ方が変わるのだろうか?」そんな疑問から始まったのが「色と味覚の関係性」の研究。実験では、赤・青・黄・緑のカラーフィルムを貼ったサングラスをかけた状態で、水・ポテトチップス・ヨーグルトを試食してもらい、味の感じ方に違いが出るかを検証。その結果、青は甘みを感じにくく、赤は甘みを強め、苦味を軽減する傾向があるなど、色が味覚に与える影響が見えてきました。中でも白いヨーグルトは変化が顕著で、今後は白と茶色のカレーを比べる追加実験も計画中。色の力を応用すれば、ダイエットや薬の飲みやすさにも役立つかも、と期待が膨らみます。

カラーフィルムを貼ったサングラス





支えてくれる人たちへの想いを、 音にのせて。

「いつも、どんな時も、ヴァイオリンと一緒に歩んできた。ヴァイオリンのない人生なんて考えられない」と話すのは、本校管弦楽部の部長を務める上原理央奈さん(中3)。昨年は「岐阜国際音楽コンクール」で第1位、弦楽四重奏の一員として出場した「日本学校合奏コンクール全国大会」でも優秀賞を受賞するなど、目覚ましい成果をおさめました。まっすぐ、ひたむきに音楽と向き合う日々の中で、上原さんが大切にしている想い、そしてその先に描く未来とは――。

全国大会と国際コンクールで、 素晴らしい成果。

毎日、知立市の自宅から電車で1時間かけて通学している上原さん。限られた時間を有効に使うと、車内では読書や英語の学習に取り組むなど、自分なりの工夫を積み重ねています。そんな上原さんが注目を集めたのは、昨年5月に開催された「第14回岐阜国際音楽コンクール」。弦楽器中学生の部で見事第1位、さらに岐阜市教育委員会賞も受賞しました。「最初から第1位を狙っていました。でも、うまく弾こうと意識しすぎると逆に失敗してしまうので、聴いてくださる人に“感謝の気持ち”を届けるつもりで演奏しました」。曲は、重厚な響きが魅力の《ブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番第1楽章》。ピブラートの表現には特にこだわり、表情豊かな音をめざしたそうです。さらに11月には、部活の先輩たちと弦楽カルテット「みそかつ」を結成し、「第13回日本学校合奏コンクール2024全国大会 中学生の部」に出場。《モーツァルトのディヴェルメント K136 第2楽章》を演奏し、アンサンブル部門で優秀賞を受賞しました。「呼吸や感覚を合わせる難しさがあるからこそ、音がぴったり合ったときの喜びは格別。仲間と音楽を創り上げる楽しさを改めて実感しました」



「あなたは性格が陽なので、陽の人しか出せない音色が出ている」と師事する先生に評されたその響きは、明るく、あたたかく、聴く人の心を包み込みます。

ヴァイオリンの音色で、 心を癒せる医師に。

上原さんとヴァイオリンの出会いは4歳のとき。大好きだった『ドラえもん』でしずかちゃんがヴァイオリンを弾く姿に憧れ、「私も弾きたい」と両親にお願いしたのが始まりでした。以来、ヴァイオリンは上原さんの生活の一部に。「1日でも練習を休むと、指が思うように動かなくなる」と、平日は1時間半、休日は8時間近く練習に打ち込んでいます。「学校の勉強と音楽の両立は簡単ではありません。でも、いつも親身になって支えてくれる先生方や仲間たち、家族がいるから頑張れます」将来の夢は、「ヴァイオリンが弾ける医者」になること。「病院に来る人の中には、不安や孤独を抱えている方もいると思います。そんなとき、ヴァイオリンの音色で少しでも心を癒すことができれば。そのためにも、もっと上を目指して練習を続けたいし、勉強でも結果を出したい」と、力強く話してくれました。奏でる音ひとつひとつに、支えてくれる人たちへの想いを込めて。上原さんの物語は、音を通して広がる世界の中で、これからも豊かに紡がれていくことでしょう。



小松菜央先生(音楽科教諭・管弦楽部顧問)と上原理央奈さん。



弦楽カルテット「みそかつ」の演奏風景。左から、第1ヴァイオリン/上原理央奈さん、第2ヴァイオリン/村松美桜さん(高1)、チェロ/伊藤聡花さん(高1)、ヴィオラ/澁谷美怜さん(高1)



2024年に獲得した賞状と盾。

